

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025年 7月 10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科 アフリカ専攻

職 名・学 年 博士後期課程4年

氏 名 赤岡 佑治

| | | | | |
|------------|--|------------------|---------|--|
| 助成の種類 | 令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成 | | | |
| 研究集会名 | 【和名】第61回国際熱帯生物保全学会学術大会 【英名】61st Annual Meeting of the Association for Tropical Biology and Conservation | | | |
| 発表形式 | <input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他() | | | |
| 発表題目 | 【和題】アフリカ熱帯林におけるシリアスゲームを用いた地域住民主体ブッシュミート管理の実現可能性 【英題】Exploring the potential of local community-led bushmeat management through hunting serious games in African rainforests | | | |
| 開催場所 | メキシコ・オアハカ州・オアハカ文化コンベンションセンター | | | |
| 渡航期間 | 2025年 6月 27日 ~ 2025年 7月 6日 | | | |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有() | | | |
| 会計報告 | 交付を受けた助成金額 | 350,000円 | | |
| | 使用した助成金額 | 350,000円 | | |
| | 返納すべき助成金額 | 0円 | | |
| | 助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください) | 費目 | 金額(円) | |
| | | 航空運賃(9,345円のみ使用) | 259,345 | |
| | | 宿泊費 | 133,900 | |
| | | 滞在費(日当) | 65,950 | |
| | | 学会参加費関連 | 101,900 | |
| 交通費(国内・国外) | | 38,905 | | |
| その他 | 0 | | | |
| 以上に助成金を充当 | | | | |
| 当財団の助成について | (今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびは、海外学会に参加する貴重な機会を頂き、誠にありがとうございました。現地ではさまざまな分野の研究者と交流し、多くの学びと刺激を得ることができました。今後とも、若手研究者へのご支援が広がっていくことを心より願っております。 | | | |

成果の概要／赤岡佑治

このたび、令和7年度京都大学教育研究振興財団の助成を受け、2025年6月29日から7月4日にかけてメキシコ・オアハカ州のオアハカ文化コンベンションセンターにて開催された第61回国際熱帯生物保全学会（ATBC2025）に参加し、口頭発表を行う貴重な機会を頂きました。本学会は、熱帯林における生物多様性の保全や持続的な利用をテーマとする世界最大級の国際会議のひとつであり、毎年世界各地で開催されています。今回の開催地であるメキシコ・オアハカは、ラテンアメリカにおける生物多様性ホットスポットであり、特に先住民コミュニティとの共生や持続可能な森林利用に関する議論が活発に行われている地域でもあります。

今年度のATBCは、例年にも増して中南米の研究者やNGO関係者の参加が多く、スペイン語によるセッションも複数設けられていました。ラテンアメリカ特有の文化的・歴史的背景と熱帯林保全の現場が交差するなかで、南北アメリカ・アフリカ・アジアの各地で共通して直面している課題、すなわち「地域住民の暮らしと野生動物保全の両立」に対する学際的かつ実践的な議論が展開されていた点が印象的でした。

私は、“Exploring the potential of local community-led bushmeat management through hunting serious games in African rainforests”（アフリカ熱帯林における地域住民主体のブッシュミート管理の可能性—狩猟シリアスゲームを通じた探究）と題した口頭発表を行いました。本発表は、2024年にカメルーン東南部で実施した野外調査をもとにした実証研究であり、現地住民とともに開発・実施したアナログ形式の狩猟シリアスゲームを通じて、地域住民自身が主体的に野生動物資源を管理する可能性について探究するものです。

本研究では、ゲームを通じて住民が持続可能な狩猟とその管理に関する意思決定を体験できるように設計しました。袋の中から動物のコインを引くというシンプルなルールながら、狩猟圧の蓄積や個体数の減少、他プレイヤーとの相互作用など、現実の資源利用に内在するジレンマが再現されるよう工夫しています。参加者には、ゲーム開始前に持続的利用の概念や保全の基礎情報を共有し、その後、モニタリング（野生動物の再投入）を実施するグループとしないグループに分けてプレイを行っていただきました。その結果、モニタリングを定期的実施したグループでは野生動物資源の枯渇を回避しやすい傾向が見られ、自己組織的な管理の芽生えが観察されました。

発表後の質疑応答や発表後の交流会では、「このゲームを通じて住民の行動変容が実際に促されたか？」「このような手法が他の地域や文化的背景の異なるコミュニティにも応用可能か？」といった、実践への応用や横展開の可能性に関する多くの質問やコメントをいただきました。また、ラテンアメリカにおいても、先住民による森林の共同管理が注目されていることから、共通の課題に対するアプローチの比較が可能であることも再認識しました。現地の研究者やNGO関係者とのネットワーキングを通じて、将来的な国際共同研究の糸口も得ることができました。

本学会への参加を通じて、地域住民が受け身の「規制対象者」としてではなく、能動的な「管理者」として資源と向き合うことの重要性、そしてそれを支援するための研究者の役割について再確認することができました。特に、現地の人々の知識や価値観を尊重しつつ、対等な協働関係を築くための対話的アプローチとして、シリアスゲームの可能性は大いにあると感じました。

今後は、学会で得られた知見を活かし、より複雑で現実の文脈に即したゲーム設計を進め、参加者が単にゲームを楽しむだけでなく、資源管理の当事者としての視点を深められるような仕組みづくりを目指していきます。また、本研究で得られた成果を国際誌での英語論文としてまとめるとともに、他地域との比較分析を通じた理論的貢献も視野に入れています。

最後になりましたが、国際学会での発表およびネットワーキングの機会をいただきました京都大学教育研究振興財団の皆様には、心より感謝申し上げます。ご支援がなければ本渡航および研究成果の発信は実現できませんでした。今回得られた経験と気づきを今後の研究活動に還元し、より広い視野で地域社会と野生動物保全の共生を探る実践につなげていきたいと考えております。謹んで感謝の意を表します。